

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red
Cross Kyushu International College of
Nursing

看護学実習における評価に関する文献検討

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2013-01-16 キーワード (Ja): 看護学, 実習, 評価, 教育評価 キーワード (En): Nursing science, Practice, Assessment, Educational assessment 作成者: 阿部, オリエ メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15019/00000061 |

著作権は本学に帰属する。

研究ノート

看護学実習における評価に関する文献検討

阿部オリエ¹⁾

看護学実習における評価は、教育成果や学生が何をどのように学んだかを判断するための重要な教育過程であると考えられる。従来の評価の目的が学習者の成績の等級づけ、進級、クラス編成などに必要な情報を得ることに限られていたとの指摘もあるが、現在の看護学実習における教育評価に関する研究がどのように進められているのか明らかにした研究は存在しない。よって、本研究は、1. 国内の看護学実習における教育評価に関する研究動向を明らかにすること、2. 看護学実習評価の発展に必要な今後の課題を明確にすることを目的とした。研究方法は、文献研究とし、Web版医学中央雑誌 Ver. 4及びJDream2を使用して検索を行った。結果、以下の点が明らかになった。1. 看護学実習における「評価」の研究は、この5年間で急速に進んでいる。2. 看護学実習における評価の主体は、教師、学生、実習指導者、卒業生、他学生と5つに分けられ、評価の客体は、教師、学生、実習記録、実習目標、実習過程、実習指導者の6つに分けられた。3. 看護学実習評価に関する研究は、教師が学生、教師が学生の実習記録、学生が実習過程を評価した研究が多かった。4. 学生が実習目標を評価した研究や学生が学生自身を評価するといった、学生の自己評価に関する研究も見られた。しかし、学生の自己評価と実習成績との関連について明らかにした研究は見られなかった。5. 評価の客体が教師の研究はわずかであった。6. 実習指導者に関する研究は、評価の主体としても客体としてもごくわずかであった。7. 実習の場が多岐に渡る看護学実習の特性を生かした教育評価の方法についての開発が必要であることが示唆された。今後の課題として、看護学実習評価において、学習者、教師、教育の管理運営者にとっての具体的な教育評価の方法の開発が課題である。特に、評価の客体としての教師に関する研究、実習指導者に関する教育評価研究の発展は急務である。

キーワード：看護学、実習、評価、教育評価

I はじめに

実習における評価は、教育成果や学生が何をどのように学んだかを判断するための重要な教育過程であると考えられる。また、看護基礎教育課程における実習は、講義・演習を統合し実践するための貴重な教育の場である。その教育を効果的に行うためにも、評価は重要な教育要素であると考えている。

「評価」とは、「何らかの目標追及活動において、ある時点の対象の状態を目標との関係で値ぶみすることであり、そこには、対象についての評価資料の収集と価値判断が含まれる。(中略) 評価にあたる英語には、evaluationとassessmentがあり、時代や文脈によって語法が微妙に変化している」¹⁾とされている。「評価」とは、目標との関連により様々な意義が含まれた複雑な概念と言えるであろう。

梶田は、評価の意義を述べる際、学習者、教師、

教育の管理運営者の三者に分け、それぞれの意義について定義している²⁾。このように「評価」は、学習者にとっても教師にとっても、教育を管理運営する者にとっても必要不可欠な教育過程であると考えられることができる。

田島は、従来の評価の目的が学習者の成績の等級づけ、進級、クラス編成などに必要な情報を得ることに限られていた³⁾ことを指摘している。これは、評価する側が教師であり、評価される側が学習者であることを意味し、そこには一方通行的な評価しか存在しなかったことを示唆していると考えられる。

それでは、学習者、教師、教育の管理運営者にとっての「評価」とは一体何なのであろうか。舟島らは、看護学教育における教育評価の定義を「主体者が何らかの教育上の目的をもって、何らかの方法で対象に関するデータを収集し、それらを一定の基準に照らして解釈する過程」とし、この定義により、評価主体として教育管理運営者、教師、学生など教

1) 日本赤十字九州国際看護大学

育にかかわる多様な人々、また、評価対象として学生の学習成果、教師の教授活動、カリキュラム、教育機関の組織運営などを含めることができる⁴⁾とし、評価スケールの開発、検討を重ねている。

このように、教育評価は、学習者、教師、教育の管理運営者それぞれにとって意義があるものだとはいえ、これら三者にとって適切な教育評価を実施することができれば、教育の質向上につながるといえるであろう。

それでは、これらの教育評価が看護学実習においてはどのように実施されているのであろうか。現在の看護学実習における教育評価に関する研究がどのように進められているのか明らかにした研究は存在しない。そこで、看護学実習における教育評価の実態を明らかにすることで、今後の看護学実習の質向上を目指すための課題が明らかにできるのではないかと考えた。よって、看護学実習における教育評価に関する研究がどのように進められているのか、その動向も含めた実態を明らかにし、看護学実習における教育評価の今後の課題を検討することを目的に文献による検討を行ったので報告する。

II 研究目的

1. 国内の看護学実習における教育評価に関する研究動向を明らかにする。
2. 看護学実習評価の発展に必要な今後の課題を明確にする。

III 研究方法

1. 研究デザイン

文献研究

2. 研究方法

文献検索は、看護学実習評価に関する2004～2009年における過去5年間の文献を対象とし、文献検索エンジンWeb版医学中央雑誌Ver.4およびJ Dream 2を使用した。検索ワードは、「看護学」「実習」「評価」「教育評価」をキーワードとした。

検索した文献の中で、評価の主体と客体が明確になっている論文を抽出し、表を用いて誰が誰(何)を評価した論文かをまとめる。なお、作成する表に関しては、藤岡らによる表⁵⁾を一部改変して使用する。

また、実習領域が明らかになっている文献に関し

ては、どの看護学領域における実習かについてもまとめる。

3. 研究期間

2007年7月～2009年3月

4. 倫理的配慮

著作権の侵害にならぬよう、引用・参考文献名および引用・参考箇所を明確に示す。

5. 用語の操作上定義

教育評価:「主体者が何らかの教育上の目的をもって、何らかの方法で対象に関するデータを収集し、それらを一定の基準に照らして解釈する過程」という舟島⁵⁾の定義に基づく。

IV 結果

1. 検索結果

研究方法に記載した方法による検索の結果、674件の該当研究が存在した。このうち、原著論文に絞込み検索をした結果、401件の文献が存在した。同じ条件下で、検索期間を1983年～2003年としたところ、404件の該当論文があった。よって、2003年までには3本の論文しか存在せず、この分野における研究は、最近5年間で急速に進んでいることがわかった。

2. 評価の主体と客体別にみた結果

本研究の主旨に合致する評価の主体と客体が明確な対象論文は94件であった。評価の主体は、教師、学生、実習指導者、卒業生、他学生であり、評価の客体は、教師、学生、実習記録(実習後のレポートも含む)、実習目標、実習過程、実習指導者に分類することができた。表1に、これらの文献数を示す。これらの結果より、教師が学生を評価した文献と教師が学生の実習記録(実習後のレポートも含む)を評価した文献、学生が実習過程を評価した文献が18件ずつと最も多かった。次いで、学生が実習目標を評価した文献が15件であった。学生が学生を評価する、いわゆる学生の自己評価に関する文献が6件と続き、教師が実習目標を評価した研究が4件であった。学生が教師を評価した文献と学生が実習指導者を評価した研究は3件ずつ存在した。1件ずつと少数ではあるが、教師が教師を自己評価した文献、実

表 1 評価の主体と客体別文献数

| | | 評価の主体 (誰が) | | | | |
|--------------|-------|------------|----|-------|-----|-----|
| | | 教師 | 学生 | 実習指導者 | 卒業生 | 他学生 |
| 評価の客体 (誰・何を) | 教師 | 1 | 3 | | | |
| | 学生 | 18 | 6 | 1 | | 1 |
| | 実習記録 | 18 | | | | |
| | 実習目標 | 4 | 15 | | | |
| | 実習過程 | 1 | 18 | 1 | 2 | |
| | 実習指導者 | 1 | 3 | 1 | | |

(数字は文献数)

習指導者が学生を評価した文献、教師が実習過程を評価した文献、教師が実習指導者を評価した文献、実習指導者が学生、実習過程、実習指導者を評価した文献が存在した。また、学生ではなく、卒業生に振り返ってもらい、過去の自己の実習過程を評価した研究も存在した。

3. 看護学領域別における結果

本研究の主旨に合致した 94 の文献のうち、看護学領域が明確になっている文献が 70 件あった。その内訳を表 2 に示す。

表 2 看護学実習領域別文献数

| 実習領域 | 文献数 | 実習領域 | 文献数 |
|-----------|-----|---------|-----|
| 母性 (助産) | 12 | 老年 | 3 |
| 地域 | 9 | 急性・心肺蘇生 | 2 |
| 基礎 | 9 | 回復期 | 2 |
| 精神 | 7 | 看護管理・政策 | 2 |
| 在宅 (訪問看護) | 7 | 成人・老年 | 1 |
| 成人 | 7 | 総合 | 1 |
| 小児 | 4 | その他 | 4 |

実習領域別に見ると、母性 (助産) の領域が 12 件と最も多く、次いで、地域、基礎領域 9 件、精神、在宅 (訪問看護)、成人領域 7 件と続く。看護管理や政策における実習評価では、新たな実習の試みとしての評価を実施していた。

V 考察

1. 論文数の推移からの考察

看護学実習における教育評価に関する研究は、ここ 5 年間で急速に増加している。その背景には、平成 14 年 3 月、専修学校設置基準等の改正に伴い、専修学校において教育活動等の状況についての自己点検・自己評価を行うこと、およびその結果を公表することが努力義務化されたこと、また、看護師等養成所が看護教育の充実に自主的に取り組む環境を整備する一環として、看護師等養成所の教育活動等に関する自己評価指針を作成するため、平成 15 年 2 月 24 日に第 1 回目の検討会が開催され、3 回にわたって議論がなされた⁷⁾ ことなどが影響していると考えられる。田島は、現在の看護基礎教育における評価を管理目的で学習者の成績をつけることが中心となっている⁸⁾ ことを指摘している。また、舟島は、看護学実習評価を学生の実践能力を判断する過程⁹⁾ と定義している。このように、看護学実習における評価とは、評価の主体は教師で評価の客体は学生としてながく定着してきたという経緯が存在してきたと考えられる。現在、評価の主体としての教員、評価の客体としての学生だけの研究ではなく、少しずつではあるが、この 5 年間で、評価の客体としての教師に関する研究も見られ始めるようになった。自らの教育活動を自己評価することを社会的責務と定義付け、教師自身も評価の客体として存在することの重要性に着目され始めたといえる。

2. 評価の主体と客体別文献の結果による考察

看護学教育評価に関する実際の研究は、評価の主体は教師、学生、実習指導者、卒業生、他学生と 5 つに分かれており、評価の客体は、教師、学生、実習記録、実習目標、実習過程、実習指導者と 6 つに分かれていた。中でも、教師が学生や学生の実習記録を評価した文献が 18 件と最も多かった。また、学生が自己の実習過程を評価した研究も同じく 18 件である。これは、教師が実習記録も含めた学生である他者を評価する研究が多くを占めること、学生が自己の実習過程を自己評価として振り返る研究が多いことを意味している。看護学実習という授業過程を評価するには、学生の意見、思い、感じ方の理解が不可欠であると考えられる。それを教師がどのように理解していくかも重要である。よって、教師が学生を評価することは、教育評価に関して重要な側面で

あるといえる。同様に、学生が学生を評価する学生による自己評価の研究が多いということは、学生が自分自身を客観的に評価する能力を身につける機会になると考えられ、教師にとっては、学生の客観的評価の能力を知る機会ともなる。

次に多い文献は、学生が実習目標を評価した研究の15件であった。これは、学生自身が実習目標をどの程度達成できたかという、学生の主観的達成度を見た研究が主であった。実習における学生の主観的目標達成度を知ることは、学生の実習達成度および満足度を知る上で重要である。自己評価という視点で看護学実習における教育評価を見ると、学生が学生自身を評価する研究が6件であった。このように、学生の主観による実習目標の達成度や学生自身の自己評価が実習成績にどのような影響を与えているかについて明らかにしている研究は見られなかった。学生の主観的評価が実習成績にどのような影響を及ぼしているかについては、看護学実習教育評価を知る上で重要な要素であると考えため検討を重ねる必要があると考える。

評価の客体が教師である研究は、教師が教師を自己評価した文献が1件、学生が教師を他者評価した研究が3件と少数であった。よって、教師の自己評価に関する研究は、未だ開拓の余地がある研究領域であると考え。評価の客体が教師である研究が少ないという背景には、教師は評価の主体であり、評価の客体として存在してこなかったことが原因であると考え。前述したように、看護学教育における評価とは、学習者の成績の等級づけ、進級、クラス編成などに必要な情報を得ることに限られていたことを裏付ける結果ではないだろうか。評価の客体としての教師や実習指導者に関する研究が進むことで、実習指導における教育の質向上をはかることができると考えている。舟島らは、看護職養成機関の自己点検・評価を推進する主体は、そこに所属する教師にはかならず、教師の教授活動の質に対する自己評価が、その中核となることを明らかにしている¹⁰⁾。看護学実習の質の向上は、教師による自己評価が重要と考えられ、今後、自己評価も含めた教師が教師を評価していく研究の進展が必要といえるだろう。

3. 看護学領域別における結果からの考察

本研究の主旨に合致する94件の文献のうち、実習の看護学領域が明確な文献は70件であった(表2参

照)。母性(助産)、地域、基礎という実習領域が明らかになったが、そのほとんどは臨床における実習であった。ここで、着目するのは、評価の主体が実習指導者である研究がごく僅かという点である。

表1より、実習指導者が学生を評価した文献が1件、実習指導者が実習過程を評価した文献が1件、実習指導者が実習指導者を評価した研究が1件と、評価の主体が実習指導者である研究は3件に留まった。一方、実習指導者が評価の客体である研究は、教師が実習指導者を評価した文献が1件、学生が実習指導者を評価した研究が3件であった。これら両者の結果より、実習指導者が評価の主体や客体となった研究は少ないといえる。

実習の場における実習指導者が担う教育的役割は大きい。臨地実習における実習指導者は、教師の教授機能や学生の学習機能など教育評価に関する重要な要素と位置づけることもできる。よって、今後は、実習指導者に視点をあてた教育評価に関する研究の発展にも課題を残しているといえる。

さらに、看護学実習の場は、臨床だけに留まらず、地域における学校や行政、会社組織など多岐に渡っている可能性が高い。これら様々な実習の場において、どのように教育評価を行うか、統一した教育評価の開発も含めて、看護学教育における課題であると考えている。

VI 結論

1. 看護学実習における「評価」の研究は、この5年間で急速に進んでいる。
2. 看護学実習における評価の主体は、教師、学生、実習指導者、卒業生、他学生と5つに分けられ、評価の客体は、教師、学生、実習記録、実習目標、実習過程、実習指導者の6つに分けられた。
3. 看護学実習評価に関する研究は、教師が学生、教師が学生の実習記録、学生が実習過程を評価した研究が多かった
4. 学生が実習目標を評価した研究や学生が学生自身を評価するといった、学生の自己評価に関する研究も見られた。しかし、学生の自己評価と実習成績との関連について明らかにした研究は見られなかった。
5. 評価の客体が教師の研究はわずかであった。
6. 実習指導者に関する研究は、評価の主体としても客体としてもごくわずかであった。

7. 実習の場が多岐に渡る看護学実習の特性を生かした教育評価の方法についての開発が必要であることが示唆された。

Ⅶ 今後の課題

看護学実習評価において、学習者、教師、教育の管理運営者にとっての具体的な教育評価の方法の開発が課題である。特に、評価の客体としての教師に関する研究、実習指導者に関する教育評価研究の発展は急務である。

本研究は、日本赤十字九州国際看護大学 2007 年度奨励研究費の助成を受けて行った。

〔 受付 2009. 7. 31 〕
〔 採用 2009. 9. 17 〕

文献

- 1) 辰野千壽、石田恒好、北尾倫彦監修：教育評価事典. p25、東京、図書文化社、2006.
- 2) 梶田叡一：教育評価入門. p12-18、東京、協同出版、2007.
- 3) 田島桂子：看護教育評価の基礎と実際. p2、東京、医学書院、1989.
- 4) 舟島なをみ、定廣和香子：看護学教育における自己評価の意義と課題. 看護展望、28(5)：17、2003.
- 5) 藤岡完治、安酸史子、村島さい子、中津川順子：学生とともに創る臨床実習指導ワークブック第 2 版. p37、東京、医学書院、2001.
- 6) 舟島なをみ、杉森みど里：看護学教育評価論一質の高い自己点検・評価の実現一. p11、東京、文光堂、2000.
- 7) 看護教育問題研究会：看護教育自己評価指針 看護教育必携資料集. p4、東京、メヂカルフレンド社、2004.
- 8) 前掲書 3). p2.
- 9) Oermann MH, Gaberson KB: Evaluation and testing in nursing education. 1998、舟島なをみ：看護学教育における講義・演習・実習の評価. p191、東京、医学書院、2001.
- 10) 前掲書 4). p17.

Literature review regarding assessment during student nursing science practice

Orie ABE, E.M.S¹⁾

Assessment during student nursing practice is an important educational process for judging educational outcome and what and how students have learnt. It has been argued that the objectives of conventional assessment have been limited to obtaining information essential for ranking learner performance, grade advancement and class composition. However, to our knowledge, there are no studies to date that clarify how research regarding educational assessment during today's nursing practice is progressing. In the present study we aimed to 1) clarify research trends regarding educational assessment of domestic nursing practice and 2) define future issues essential for the development of nursing practice assessment. Research methods comprised a literature study; searches were performed using the online edition of the *Japana Centra Revuo Medicina Ver. 4* and *JDream2*. The following points were elucidated. 1) Research into "assessment" during nursing practice has rapidly progressed over the last 5 years. 2) Assessment during nursing practice is performed by five main groups: teachers, students, practice instructors, graduate students, and other students. Meanwhile, the six objects of assessment comprise: teachers, students, practice records, practice targets, the practice process, and practice instructors. 3) Much of the research regarding nursing practice assessment has covered teachers assessing students, teachers assessing student practice records and students assessing the practice process. 4) Research was also found regarding student self-evaluation, such as students assessing practice targets and themselves. However, there was no research clarifying the relation between student self-evaluation and practice performance. 5) There was little research with the teacher as the object of assessment. 6) There was also negligible research regarding practice instructors as either the assessor or the object of assessment. 7) These findings suggest the need to develop methods for educational assessment utilizing the characteristics of nursing practice in a wide-range of practice settings. Future issues during assessment of nursing practice include development of specific assessment methods for learners, teachers, and education administrators and managers. In particular, research regarding teachers as the object of assessment and the progression of educational assessment research regarding practice instructors are urgently required.

Key words: nursing science, practice, assessment, educational assessment

1) The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing